



連峯堂 彩り 冬号

RENPOUDO'S COLLECTION WINTER.



HP



Instagram



奥田連峯堂

TEL:075-561-3655

FAX:075-525-1148

営業時間：11時 - 18時

定休日：毎週水曜

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側244

<https://www.renpoudo.com>

renpoudo@mth.biglobe.ne.jp

1.

松梅菊文瓢形徳利 一對

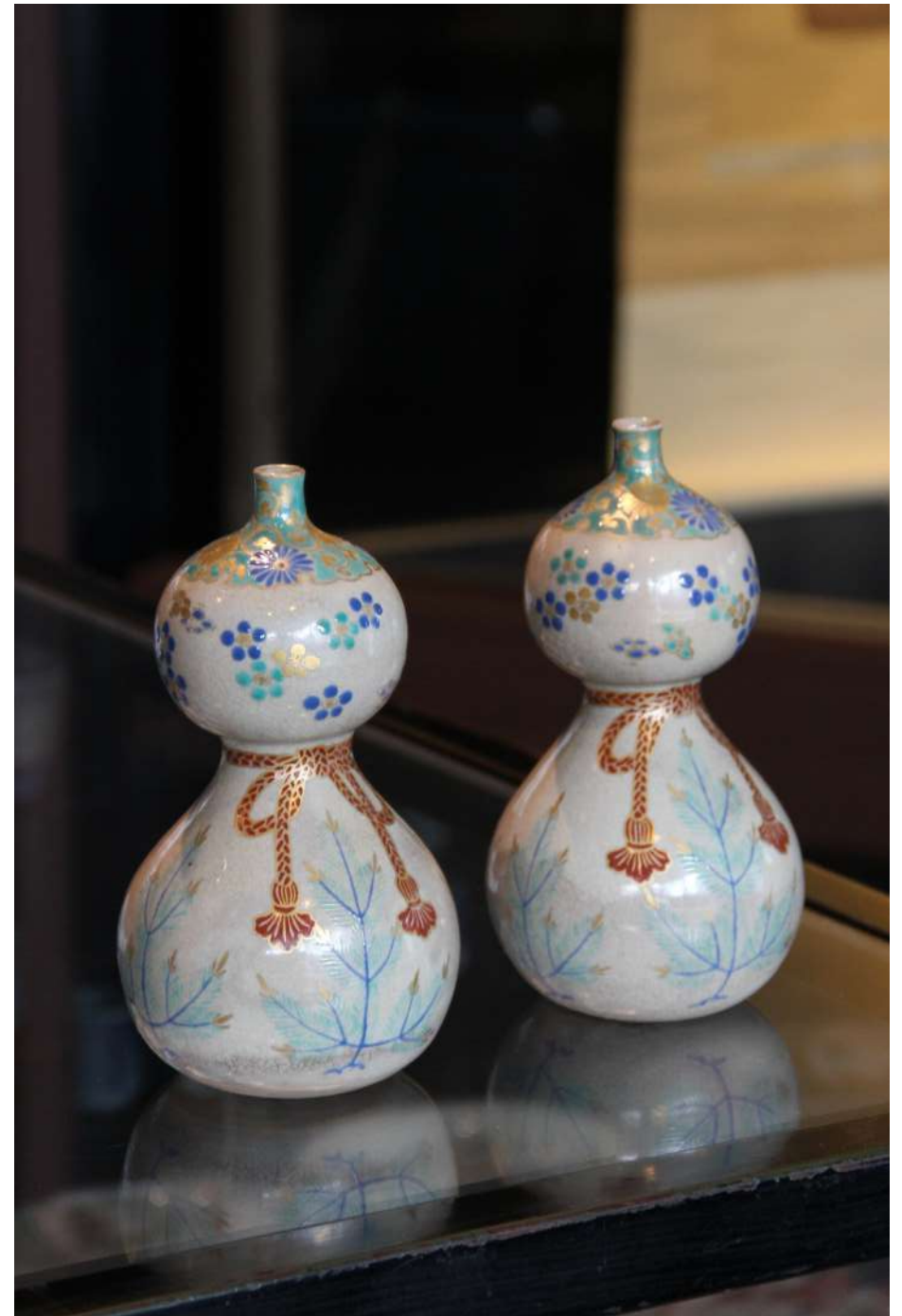
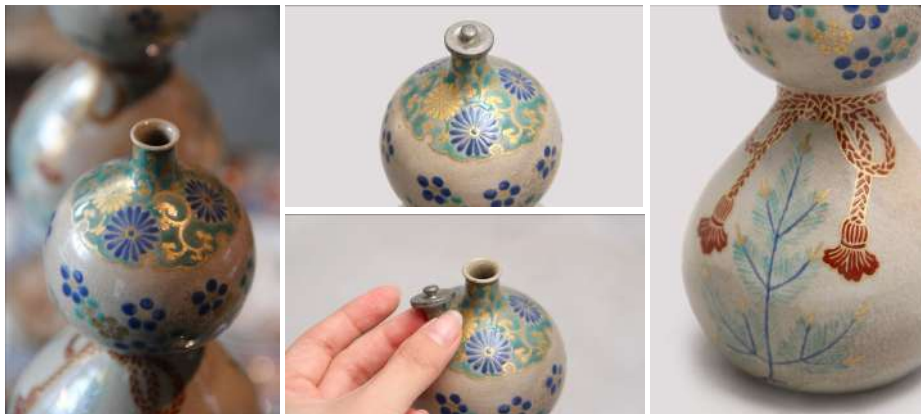
古清水

江戸時代

胴径9.5cm 高さ17cm

瓢箪形の優雅な造形に、松・梅・菊の吉祥文様が金彩とともに丁寧に描かれています。
錫製の蓋と漏斗が付属しており、当時の酒器としての風情をより深く味わうことができます。

全体に貫入が見られ、釉面には汚れやシミが入っていますが、これらは長い年月を経た古陶ならではの風合いを醸し出しています。
酒器としてはもちろん、飾り物としても美しい逸品です。



2.

寿字樽形水注

古伊万里

江戸時代

径14cm 高さ20cm

古伊万里の寿字樽形水注です。本来は木製である結樽の形状を、磁器で精巧に模したユニークな造形が特徴です。

本作品の天面の部分には、上絵の赤や鮮やかな金彩を駆使して描かれた華やかな花唐草文様が、全体を彩っています。その中に白く残された窓内には、藍色の染付で力強く「寿」の文字が書かれており、吉祥の願いが込められています。ハレの日のための特別な逃えであったことがうかがえます。

取っ手は、縁起の良い松樹の姿をかたどっており、細部に至るまで繊細な技巧が凝らされています。戸栗美術館の図録に類似品が掲載されるなど、その美術的価値は高く評価されています。蓋に直しとソゲが見られます。底部に窯キズが見られます。



3.

真砂肌色絵蔦菓子器

2代 真葛 香山

共箱

大正 - 昭和

径22cm 高さ15cm

紅葉した蔦の葉と、瑞々しい青葉が繊細に描かれ、季節の移ろいを感じさせる趣ある意匠となっています。外側は釉薬を施さず、素朴で温かみのある焼締の風合いが魅力です。一方、内側には釉薬がかけられ、細やかな貫入が生まれ、静かな美しさとともに、器としての深い味わいを感じさせます。



4.

呉須泥刷毛目扁壺

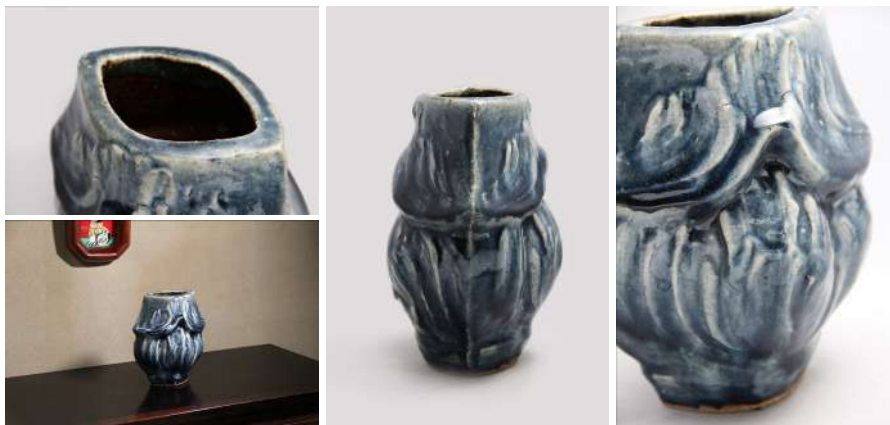
河井 寛次郎

共箱

昭和

口径9.5cm×14cm 胴径14cm×20cm 高さ23cm

民藝運動を代表する陶芸家・河井寛次郎による、力強くも繊細な造形が魅力の呉須泥刷毛目扁壺です。呉須泥による深みのある藍色と、大胆に施された装飾が絶妙に調和し、見る者を惹きつけます。独特なフォルムは、彫刻的な存在感を放っています。寛次郎の哲学と美意識が凝縮された、希少な逸品です。



5.

白地鉄釉菱花文扁壺

河井 寛次郎

河井紅葩極箱

昭和

口径5cm 胴径19cm×9cm 高さ14.5cm

民藝運動を牽引し、日本を代表する陶芸家、河井寛次郎による作品です。彼が追求した素朴で温かみのある美は、日本の伝統的な陶芸の中に、モダンな感覚を吹き込むものでした。

本作品は、その名の通り、扁平な長方形のユニークな形状をしています。全体に白釉が掛けられ、その上に鉄釉で菱形の花模様が大胆に描かれています。この菱形の花文は、白と鉄釉のコントラストが際立ち、見る者に強い印象を与えます。

一輪挿しとして花を生けるのはもちろん、オブジェとしてもそのままでも美しい存在感を放ちます。また、箱書きは娘の河井紅葩によるものです。



6.

塩釉藍差扁壺

濱田 庄司

共箱

昭和

人間国宝

口径3.5cm×2.8cm 胴径15cm×8cm 高さ22cm

人間国宝であり、民藝運動を代表する陶芸家・濱田庄司による塩釉の扁壺です。

温かみのある褐色の地に、藍色で力強く描かれた十字文様が映える意匠。塩釉特有の結晶状の肌合いと釉色の変化が、濱田作品らしい素朴さと存在感を際立たせています。



7.

白磁面取花瓶

上田 恒次

共箱

昭和

口径14cm 胴径27cm 高さ33.5cm

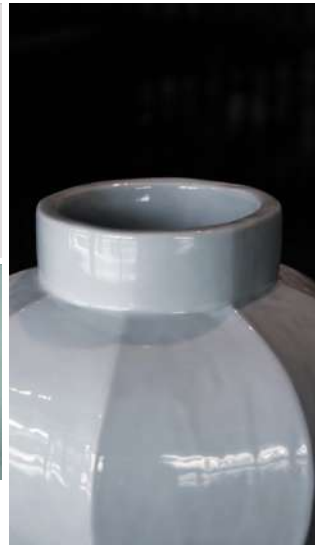
この花瓶は、昭和に活躍した陶芸家、上田恒次による白磁面取花瓶です。

堂々としたサイズで、均整の取れた美しいフォルムが特徴です。全体に施された面取りが、滑らかな白磁の表面に繊細な陰影を生み出し、シンプルながらも表情豊かな存在感を放っています。凛とした佇まいは、どのような花や空間にも美しく調和するでしょう。

上田恒次は、白磁や練上などの制作を得意とし、その洗練された造形と釉薬の美しさで高い評価を得ています。



花瓶の内側の底です。
窯キズが見られます。



8.

均窯小壺

楠部 弥弍

共箱

昭和

径8cm 高さ8.5cm

近代陶芸の名匠・楠部弥弍による、均窯釉の小壺です。

柔らかな青磁釉に、釉薬のたまりが美しい窯変を生み、紫紅色の斑文が幻想的な趣を添えています。胴部には四方に獅子または猿の文様が陽刻され、静謐な中に力強さを感じさせる造形となっています。小ぶりながら存在感のある一品で、楠部弥弍の高度な釉薬技法と造形美を味わえる逸品です。



9.

信楽花入

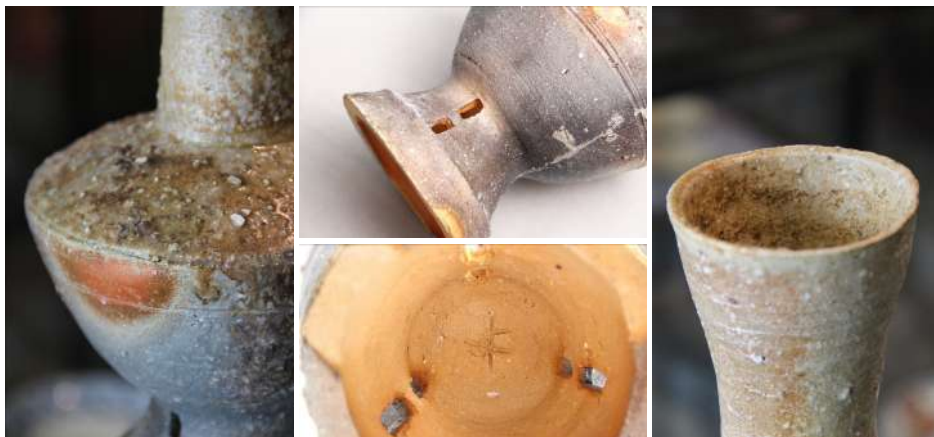
杉本 貞光

共箱

昭和 -

口径8cm 胴径16cm 高さ29cm

陶芸家・杉本貞光による信楽焼の花入です。
自然釉が美しく流れ、焼成によって生まれる豊かな表情が特徴です。
胴の丸みと首のすっきりとした立ち上がりが見事に調和し、素朴さと力強さを兼ね備えた一品。
床の間や茶席をはじめ、現代の空間にも自然に溶け込み、四季折々の花を引き立てます。



10.

晴白練上香炉

松井 康成

共箱

昭和 - 平成

人間国宝

径12.5cm 高さ11.5cm

人間国宝・松井康成による練上手技法の香炉です。淡い桜色と藍色が溶け合うように重なり合い、柔らかくも気品ある表情を見せています。

繊細な文様は、異なる色土を幾重にも重ね、練り合わせて生み出される松井独自の練上技法によるもの。

黒塗の塗蓋には唐草文様の透かしが入り、深みのある艶と朱色のつまみが全体を引き締めています。



1 1.

金彩象嵌赤絵鳳凰文八角香炉

坪島 土平

共箱

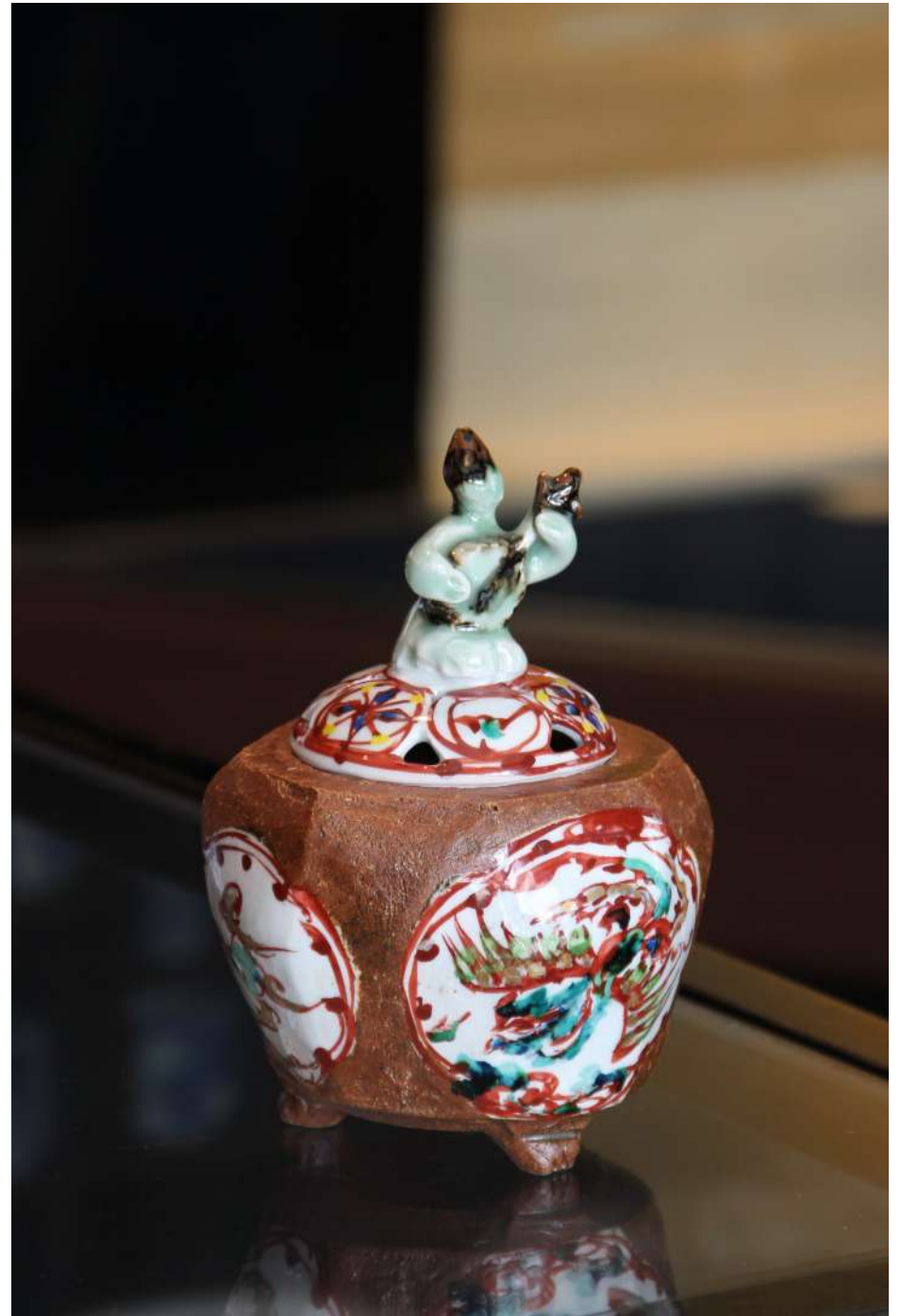
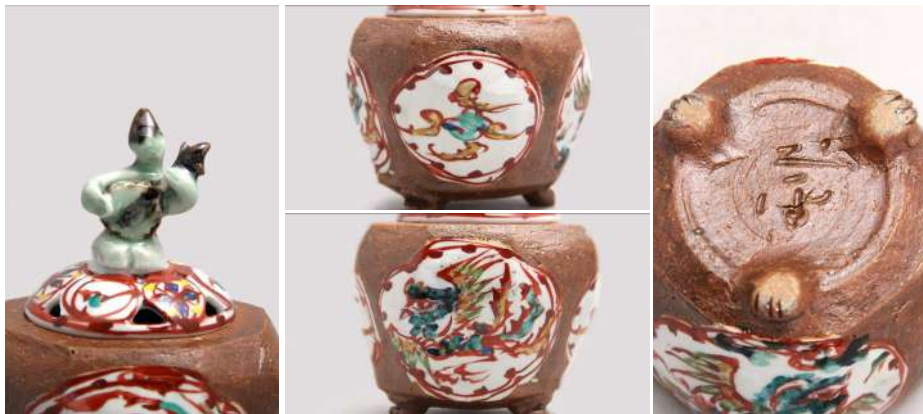
昭和 - 平成

径11.5cm 高さ16cm

近代における陶芸家・坪島土平による、独創的で華やかな八角形の香炉です。側面には、赤絵と金彩で描かれた鳳凰文が印象的にあしらわれています。蓋には、楽器を奏でる人物をモチーフにしたユーモラスな摘みが据えられ、全体に遊び心と高度な技術が凝縮された逸品となっています。

和室・洋室を問わず、空間に個性と品格を添える芸術的な香炉としておすすめです。

坪島土平は、明治から昭和にかけて活躍した実業家であり陶芸家でもある川喜田半泥子に師事した作家です。三重県津市の広永窯にて作陶し、色絵や染付の作品のほか、志野・織部・朝鮮唐津など、多彩な技法を自在に操る幅広い作風で知られています。



12.

曲輪茶箱

角 偉三郎

共箱

径27cm×15cm 高さ15cm

石川県の漆工芸作家・角偉三郎による、伝統的な技法「曲輪（まげわ）」を用いた漆塗りの茶箱です。柔らかな曲線と深みのある艶が魅力で、二重蓋構造により密閉性にも優れています。茶箱としてはもちろん、小物の収納箱やインテリアとしてもお使いいただけます。和室の床の間や洋風の空間にも自然に溶け込む美しい佇まいは、実用品でありながら飾って楽しめる工芸品。伝統と現代美を融合させた、唯一無二の逸品です。



13.

小皿 5客組

角 偉三郎

径9.4cm 高さ3cm

石川県の伝統工芸作家、角偉三郎による小皿の5客組です。漆塗りで仕上げられた小皿は、黒と赤の美しいコントラストが特徴的です。

日常の食卓はもちろん、贈り物としても最適です。美しいデザインと優れた技術が光る、和のエレガンスを感じさせるアイテムです。



14.

白磁碗

黒田 泰蔵

共箱

昭和 - 令和

径14cm 高さ6.5cm

現代陶芸を代表する作家・黒田泰蔵による白磁茶碗です。
限りなく純白に近い透き通るような白磁と、完璧なまでに研ぎ澄まされたフォルムが、静謐で凜とした美しさを湛えています。
一切の装飾を排し、かたちと釉薬の美しさのみで見る者を魅了する、まさに黒田作品の真髄が表れた逸品です。



15.

金襴手丸紋向付 10客組

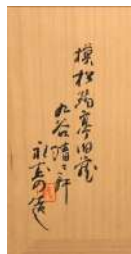
初代 矢口 永寿

共箱

径12cm 高さ6cm

器の内側には、色鮮やかな鳥の絵が描かれています。一方、外側には金襴手で縁取られた丸紋が配され、その中には「吉」の文字と縁起の良い蝙蝠が描かれています。

矢口永寿は、京都の永楽家や清水六兵衛の門人らを迎え、祥瑞、交趾、仁清写、乾山写など京風の陶磁器を多数制作しました。その作品は、本歌を凌ぐ出来栄えと評されています。



16.

碧釉搔落兔図中皿 6客組

加藤 土師萌

共箱

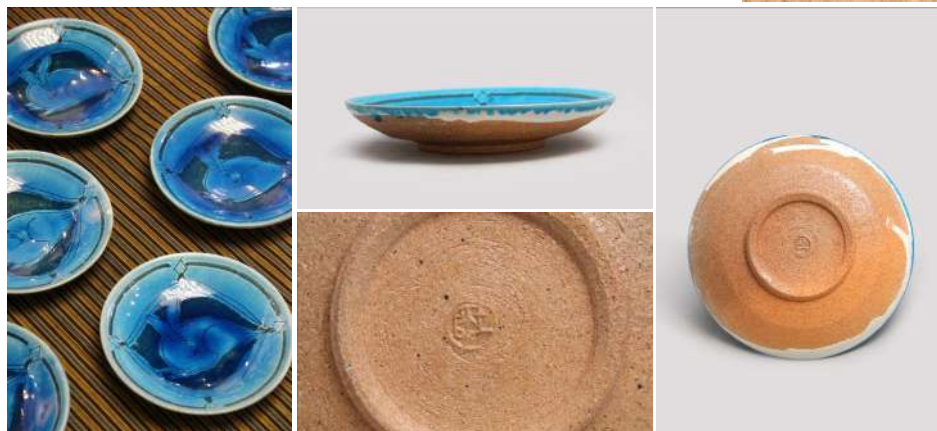
昭和

人間国宝

径18cm 高さ3.8cm

人間国宝である加藤土師萌によって制作された、碧釉の美しい中皿です。

深みのある鮮やかな碧釉が全体にかけられ、その上から搔き落としの技法で愛らしい兔の姿が描かれています。釉薬の濃淡と、力強くも柔らかな線描が、独特の表情を生み出しています。



17.

長寛写根来絵替煮物椀 10客組

田中 表阿彌

共箱

径13.5cm 高さ10.5cm

田中表阿彌による絵替わりのお椀10客組です。
以下の様な文様のお椀がそれぞれ2客ずつあります。

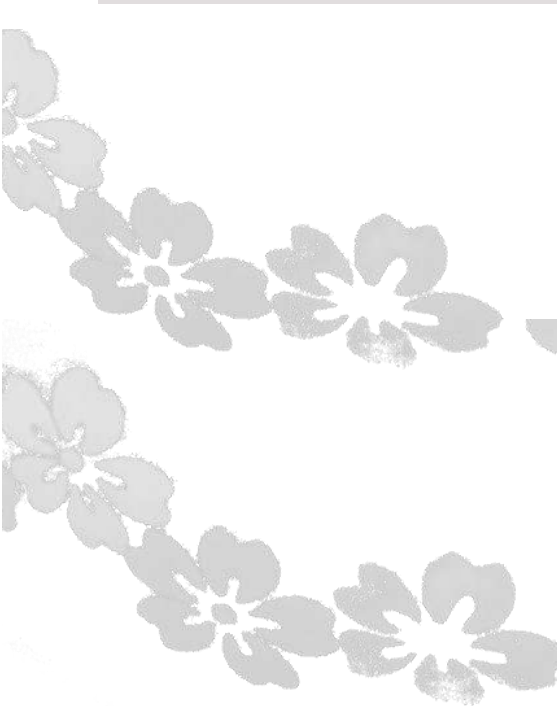
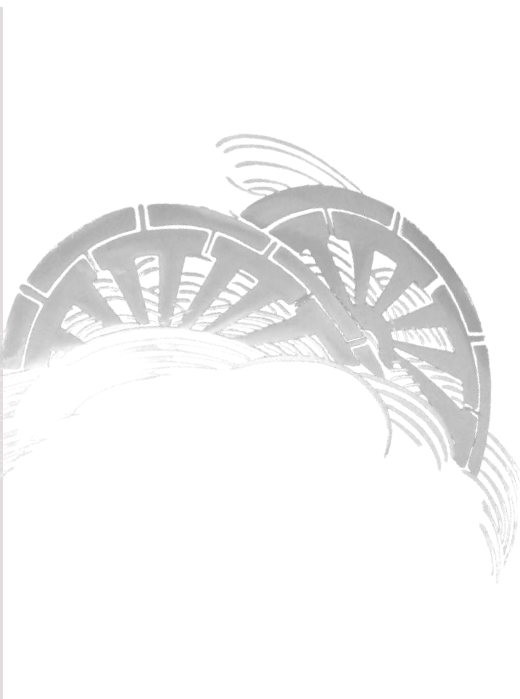
- ・秋草
- ・片輪車
- ・桜、柳
- ・貝づくし
- ・吉祥花文

内側は刷毛目の洗朱
(あらいしゅ)に
なっています。



吉祥花文





18.

額 ガラス絵 裸婦

松野 真理

額のサイズ：縦45cm 横38cm

鮮やかな色彩と柔らかな筆致で描かれた松野真理によるガラス絵作品。

透明感のあるガラスの質感が、裸婦の肌の光を美しく際立たせています。

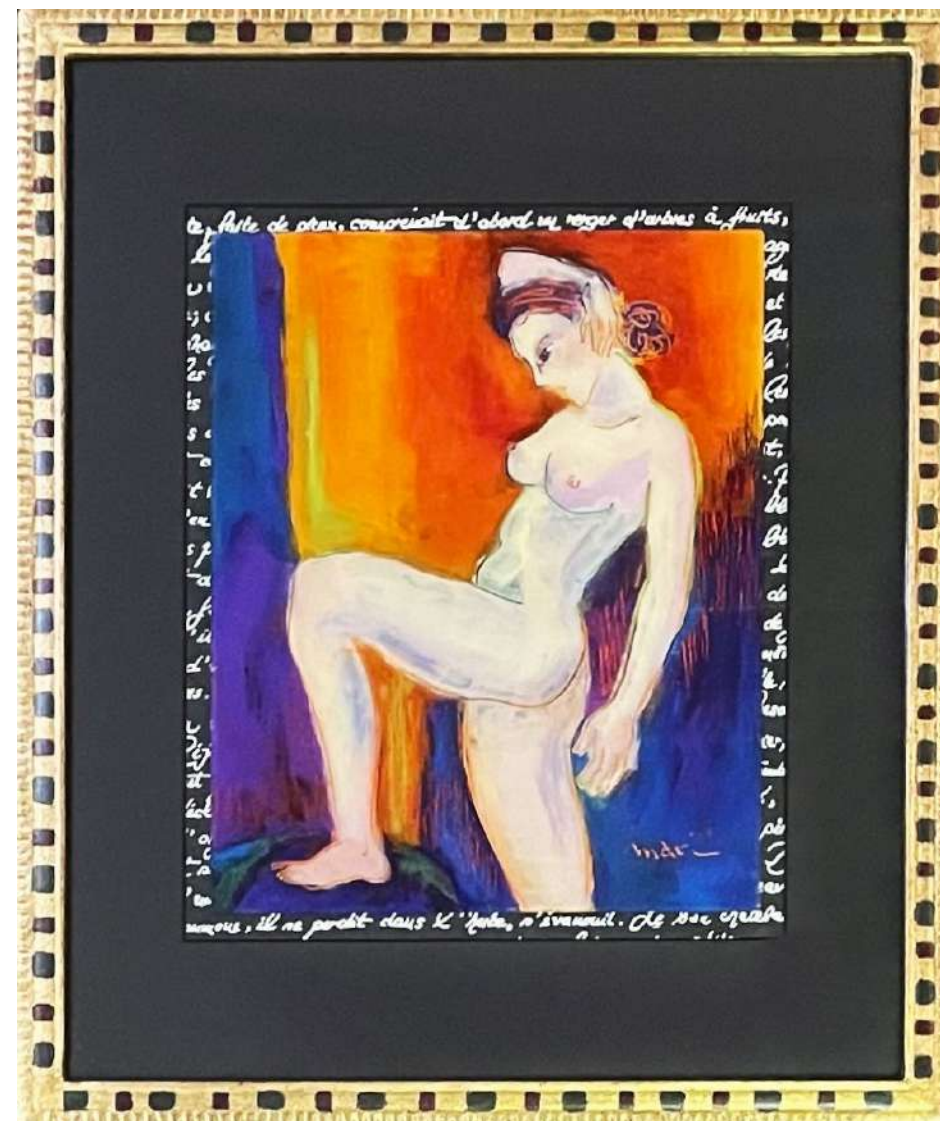
背景には情熱的なオレンジやブルーの対比が配され、静寂と生命感が共存する印象的な一枚です。

上質な額装により、アートとしてもインテリアとしてもお楽しみいただけます。

松野真理（1950-2023）は神戸に生まれ、神戸とパリにアトリエを構えながら、裸婦をモチーフに心象表現を追求した画家です。

1975年に京都薬科大学を卒業後、京都市立芸術大学に学び、在学中から独立展に出品。独立賞を受賞し、会友を経て無所属として活動しました。

関西を中心に23回の個展を開催し、豊かな色彩と詩情あふれる作品で多くの人々を魅了しました。



19.

額 型絵染 小皿文様

芹澤 銑介

芹澤長介極

昭和

人間国宝

額のサイズ：縦58cm 横95cm

本作は、重要無形文化財保持者（人間国宝）であった染色家・芹澤銑介による「型絵染」の額装作品です。三枚の小皿文様をモチーフに、海の幸、人物、植物と文字をそれぞれの円形内に配置し、温もりある色彩と民芸的な味わいをもって表現されています。

落ち着いた赤茶の台紙に映える円形の文様が、空間にリズムとやさしさを与えます。

本作品は芹澤銑介の息子である芹澤長介による極めが付いています。



20.

額 ガラス絵 犬

芹澤 銑介

昭和

人間国宝

額のサイズ：縦19cm 横18.5cm 厚さ4.8cm

ガラス絵とは、透明な板ガラスの裏面に、泥絵の具や油絵の具によって普通の絵と逆の順序に描き、表面から見る仕組みの絵です。

芹澤銑介は、染色家として活躍しましたが、幼い頃の夢は画家になることでした。ガラス絵などの肉筆作品は、型絵染作品と並んで評価を得ています。

八角形の木製額に収められ、愛らしい犬の姿がカラフルに描かれています。赤と緑の背景に浮かび上がる犬の表情はどこかユーモラスで、民芸の精神と遊び心を感じさせる一枚です。

真ん中に犬の絵が描かれ、右に「けい」、左に「介」と書かれています。

額の裏側には、「犬」と書かれ、左下に芹澤の印があります。



21.

型染 雛道具紙雛図幅

芹沢 銑介

絹本
共箱
幅69cm 長さ195cm
昭和
人間国宝

本作は、人間国宝・芹沢銑介が型染技法によって制作した「雛道具紙雛図」の掛幅です。

鹿児島に伝わる郷土玩具「糸雛（いとびな）」をモデルとした図柄で、糸雛特有の素朴さと可憐さを、芹沢ならではの明快な色使いと緻密な文様表現で生き生きと描き出しています。

中央上部には愛らしい紙雛が据えられ、その下に雛道具が彩り豊かに配置されています。型染による力強い線と鮮烈な色面が調和し、民藝の精神と芹沢の美意識が見事に結実しています。

芹沢は仙台に住む初孫のために本作のような雛道具紙雛図を制作し、軸装して贈ったと言われています。家族への想いが託された、ほのぼのとした温情がにじむ一点です。



22.

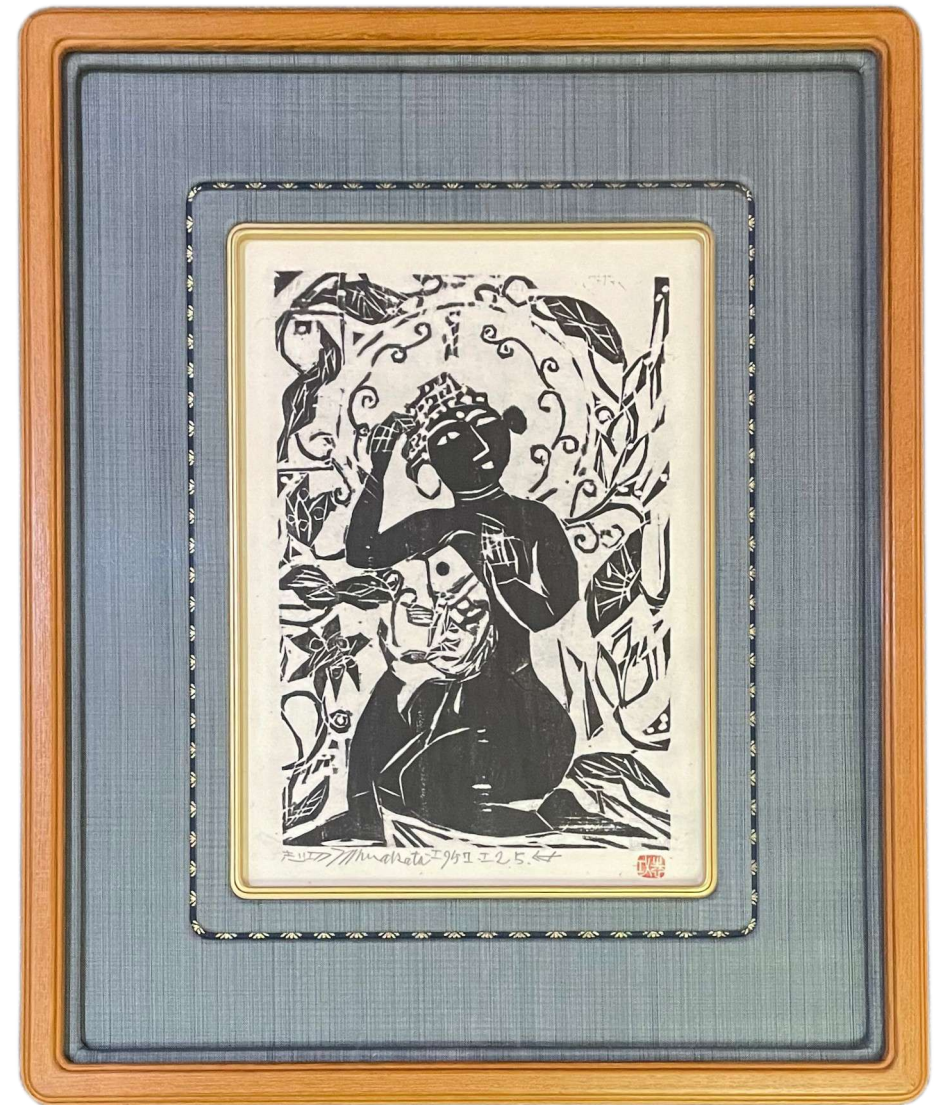
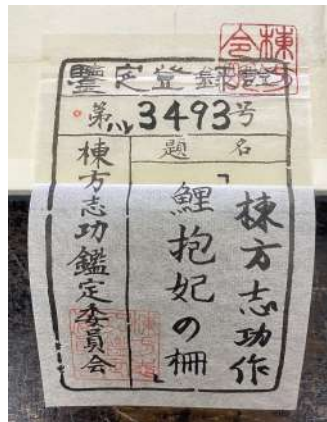
額 鯉抱妃の柵

棟方 志功

棟方志功鑑定委員会 鑑定書有

額のサイズ：縦59cm 横49cm

棟方志功による1957年の版画作品「鯉抱妃の柵」です。女性が鯉を抱く幻想的な構図です。本作には、棟方志功鑑定委員会による鑑定書が付属しております。
額装は、皐月表玄によるもので、作品を引き立てる上質な仕上がりとなっています。



作家略歴（五十音順）

上田 恒次

1914（大正3）年 - 1987（昭和62）年
京都の呉服商に生まれる。富本憲吉の『窯遍雑記』を読み陶芸家を志すようになる。上田は京都市立第二工業学校（現京都市立伏見工業高等学校）陶磁器科を卒業し、独学で建築を学んだ。河井寛次郎に師事。日本橋三越本店美術部で自身初となる個展を開催する。以降は各地で開催。富本憲吉記念館建設にあたり、設計および工事を監督する。柳宗悦・浜田庄司・富本憲吉らとも交流があった。

角 偉三郎

1940（昭和15）年 - 2005（平成17）年
1940年、石川県輪島生まれ。15歳で沈金（漆に細い線を彫り、そこに金を施す技法）の名人、橋本哲四郎の下に弟子入りする。1962年に修業を終えると、角は沈金技法を用いた漆のパネル、絵画風の作品の制作に取り組んだ。24歳で日展に初入選したのち17回入選、30代で日展特選となる。1982年、角はすべての公募展から退き、初めて椀だけの個展を開く。

加藤 土師萌（かとう はじめ）

1900（明治33）年 - 1968（昭和43）年
愛知県瀬戸生まれ。本名一（はじめ）。陶芸図案家から作陶に進み、岐阜県陶磁器試験場の技師となるかたわら、帝展工芸部に入選を重ねて注目される。横浜市日吉に築窯して陶芸に専念、戦後は日展や日本工芸会で活躍。1961年、色絵磁器の人間国宝に認定。

河井寛次郎

1890（明治23）年 - 1966（昭和41）年
島根県生まれ。東京高等工業学校窯業科卒後、京都市陶磁器試験場に入所。京都市五条坂に窯を築き作陶を行う。東洋古陶磁の技法による作品を制作していたが、民藝運動に関わり、実用を意識した作品に取り組むようになる。文化勲章、人間国宝、芸術院会員への推薦を辞退。

楠部 彌次

1897（明治30）年 - 1984（昭和59）年
染付、青磁、鈞窯、仁清風など、作風は多技多彩。彩埴と名付けた釉下彩磁は独自のものである。また京焼の伝統を踏まえた色絵は優美と言われる。帝展や日展などで活躍。昭和53年、文化勲章受章。

黒田 泰蔵

1946（昭和21）年－2021（令和3）年
滋賀県能登川町（現・東近江市）生まれ。民藝運動に連なる陶芸家・島岡達三に師事しながらも、初期の制作活動は主にカナダで展開するという異色の経歴を持つ。1980年代後半に帰国後は静岡県伊東市にアトリエを構え、1990年代以降は白磁作品に専念。轆轤による茶碗や壺のほか、円筒シリーズなど、用途を超えた純粹芸術的作品も手がけた。作品は、ヴィクトリア&アルバート美術館（ロンドン）など世界各国の美術館に収蔵。日本を代表する陶芸家のひとりとして国際的にも名を知られている。

杉本 貞光

1935（昭和10）年 -
東京生まれ。1968年、信楽山中に穴窯築窯。1974年、大徳寺 立花大亀老師より指導を受ける。1998年、香雪美術館にて信楽展出品。1991年、ニューヨーク・ロックフェラーセンターにてアメリカ初個展。1992年、吉兆・湯木美術館（大阪）に作品が収蔵される。1993年、ミュンヘン・ギャラリーフレッドハーンスタジオにてドイツ初個展。1994年、エール大学美術館に作品が収蔵される。2002年、京都・建仁寺晋山記念として井戸茶盃を納める。以降、様々な個展を開催している。

鈴木 五郎

1941 -
愛知県豊田市に生まれ。桃山陶芸（織部・志野・黄瀬戸）を基盤としながらも、伝統に縛られず独創的なスタイルを追求「五利部（ごりべ）」というオリジナル技法を開発。名前は自身の「五」、千利休の「利」、古田織部の「部」から取られ、異なる技法を組み合わせた統一感ある作品を生み出す アメリカでの経験から、アートの陶芸への感覚を深化させ、壺や椅子、巨大な皿など規模の大きな作品にも挑戦。

芹澤 鉦介

1895（明治28）年 - 1984（昭和59）年
静岡市生まれ。東京高等学校図案科卒業後、生涯の師である柳宗悦と沖縄の染物紅型に出会ったことにより型染めを中心とした道に進む。1956年、人間国宝に認定。

田中 表阿彌（たなか ひょうあみ）

1881（明治14）年 - 1972（昭和47）年
京都の蒔絵師、塗師。木村表斉を始祖とする表派の一人。二代鈴木表朔に師事。

坪島 土平

1929（昭和4）年 - 2013（平成25）年
大阪生まれ。1946年、川喜田半泥子に師事。1963年、川喜田半泥子没後に廣永陶苑を継承。大阪高島屋にて個展開催、以降、東京日本橋高島屋と共に個展開催。

濱田 庄司

1894（明治27）年 - 1978（昭和53）年
神奈川県生まれ。東京高等工業学校（現東京工業大学）窯業科に入学、板谷波山に師事。同校を卒業後は、河井寛次郎と共に京都市立陶芸試験場にて主に釉薬の研究を行う。この頃、柳宗悦、富本憲吉、バーナード・リーチの知遇を得る。大正9年、イギリスに帰国するリーチに同行、共同してセント・アイヴスに築窯。大正13年、帰国し、沖縄 壺屋窯などで学び、その後、栃木県益子町で作陶を開始。昭和30年、人間国宝に認定。

松井 康成

1927（昭和2）年 - 2003（平成15）年
長野県生まれ。明治大学を卒業し、茨城県笠間市にある浄土宗月崇寺の住職の跡を継ぐ。その後、廃窯となっていた、山門下の窯を再興し、東洋陶磁の研究を行う。栃木県の田村耕一に師事。練上手の技法を研究し、完成させ、昭和44年には、第9回伝統工芸総裁賞や日本陶磁協会賞などの数々の賞を受賞。平成5年、人間国宝に認定。

松野 真理

1950（昭和25）年 - 2023（令和5）年
神戸生まれ。神戸とパリにアトリエを持ち、裸婦をモチーフに心象表現を追求した画家。。1975年京都薬科大学卒、その後に京都市立芸術大学入学。在学中より独立展出品。その後、独立賞、会友を経て無所属。関西中心に個展23回。

2代 真葛 香山

1859（安政6）年 - 1940（昭和15）年
横浜の陶芸家。本名半之助。帝室技芸員の初代香山を助け優れた作品を残す。大正5年、初代香山逝去後、正式に2代香山を襲名する。帝展・各美術展に出品した。板谷波山と並んで関東の美術界に君臨した。

棟方 志功

1903（明治36）年 - 1975（昭和50）年
20世紀の美術を代表する世界的巨匠の一人。日本の板画家。青森県出身。昭和17年以降、彼は版画を「板画」と称し、木版の特徴を生かした作品を一貫して作り続けた。

初代 矢口永寿

1870（明治3）年 - 1952(昭和27)年
石川県生まれ。生来の器用人で書画骨董に通じ、料理も巧みであったが青年時代に湯宿をやめ、関西へ出る。帰郷後、黒谷焼という楽焼を始める。京都永楽家の高弟初代滝口加全をむかえ、京風の陶磁器を製陶する窯を築く。自らは永寿と号した。また、清水六兵衛の門人戸山寒山を招く。その後、能美や金沢から多数の陶工を集め、多くの佳作を残す。作品は祥瑞、交趾、仁清写、乾山写などの茶陶が多く、本歌をしのぐものも少なくない。

Memo